

二〇一六年四月一九日(参加者一六名)

大岩を抱擁したる山つつじ	宏	虎
碧天に万紅散らす山つつじ	宏	虎
園児らの列へと春の落葉かな	宏	虎
神の杜より被所へ初蝶来	う	つぎ
春光や鳥居の弊の打ちそよぎ	う	つぎ
春風に鳴る鈴なりの祈願絵馬	う	つぎ
踏青子 函鑑片手に深山道	明	日香
雲揺らぐかとうち仰ぐ青嵐	明	日香
カラフルな吾を見よとて道をしへ	明	日香
ぺちやくちやと小枝揺らして囀れる	直	子
うららかやまるやかなりし御神水	直	子
蜂の腹ポンプのごとし蜜を吸ふ	直	子
滴りが苔をさ走るなぞへかな	わ	かば
存問のごとくに余花に佇ちにけり	わ	かば
風に揺れ唄ふがごとき新樹かな	わ	かば
参道の右手に弓手に山つつじ	満	天
行厨のベンチの四囲は山つつじ	満	天

青銅の拜殿高く緑立つ	小	袖
春惜しむ神代の杜をたもとほり	小	袖
四阿の四方より通ふ若葉風	か	かし
四阿に行厨終へて春眠し	か	かし
花吹雪千古の宮へとめどなく	菜	々
散る花に沈思黙考一詩人	菜	々
余震また余震に怯え花は葉に	せ	いじ
真青なる空を掃きゐる若楓	せ	いじ
車窓いま至福の景や花の旅	孝	子
春愁の因をたどれば地震のこと	孝	子
蒼天へ高舞ふ風の落花見よ	ぼ	んこ
磴のぼる吾を励ます道をしへ	ぼ	んこ
苦吟する句帳へふはと春落葉	よ	う子
中空へ千木の尖りし杜若葉	よ	う子

二〇一六年四月一九日(参加者一六名)

定例句会みの選